

# 31 大日本私立衛生會雜誌の齒科的記 載

○落合 俊輔・谷津 三雄

東京齒科大学は高山紀齋により明治二十三年一月に設立された高山齒科医学院に始まる。高山は嘉永三年十二月十二日岡山に生れ、明治五年に渡米しサンフランシスコでドクトル・ヴァンデンボルグに齒痛のため通院中、すすめられて入門、明治十一年三月帰国、四月銀座に開業のかたわら高山齒科医学院を設立した。

高山の医術開業免状は内務省衛生局報告第十六号、十二ページに「成規ノ試験ヲ経テ医術開業免状ヲ授與シタル者、自明治十一年五月至同十三年九月」の中に「内外科、東京府寄留、岡山縣下高山紀齋、二十七年九月」とあり、免状は同年六月（高山齒科医学院設立御認可願いによる）に授与された。

高山には明治十四年六月に本邦最初の齒科専門書『保齒新論』上下二巻、『齒の養生法』（明治十五年刊）『齒科藥物摘要』（明治十九年刊）『通俗齒の養生法』（明治二十二年刊）次いで、『衛生保齒問答』（明治二十三年六月刊）など多くの著書がある。その内、この『衛生保齒問答』の「緒言」に「今又諸家の質議に答フル者ヲ輯メテ一冊子と成シ之ヲ刊行ス、幾クハ以テ医科ノ参考ニ供シ」とあり、また「凡例」に「此書ノ原稿ハ大日本私立衛生會會員ノ質議及び朋友ノ質問ニ答ヘシ者ナリ」とある。その内容は「第一全身病ト齶齒トノ關係」から「第五十二金充填ノ注意」について百九十一ページにわたり書かれている。

また『衛生保齒問答』にある長与専齋（大日本私立衛生會副会頭）の「題言」に「高山君は齒科白眉大日本私立衛生會推挙審事委員」と書かれてある。そこで大日本私立衛生會雜誌第一号（明治十六年六月刊）から第五十五号（明治二十二年十二月刊）を参考資料とし、高山がいつ審事委員になったのか、また最初の質問は誰によって、如何なる内容でなされたのかなどについて、本誌の質問内容と『衛生保齒問答』の内容とを比較検討した。

大日本私立衛生会雑誌第十五号（明治十七年八月刊）の本  
会報告の項（六十九ページ）に「本会会員審議委員を囑託し  
承諾を得た」とあり、医学科に足立寛、北里柴三郎、三宅  
秀の三氏があるが高山の名はない。同誌第二十九号（明治  
十八年十月刊）の本会記事に第二十七常会（明治十八年九月  
二十六日）で「今般会頭より左の如く審事委員を委託せり」  
とあり、医学科・高山紀齋君の名がみられる。

本誌第三十号（明治十八年十一月刊）に新潟県会員、内藤  
久徴氏からの「〇齶齒豫防ノ質問」が最初であり、その応  
答が高山により四十七〜五十三ページにわたり記載されて  
いる。これが『衛生保歯問答』の第一、全身病ト齶齒トノ  
関係と思われる。本誌第三十五号（明治十九年四月刊）に東  
京会員、岡戸宗七郎氏から「〇糖類ト齒牙ノ関係ニツイ  
テ」、高山が応答を五十三〜六十ページにわたり記載して  
いる。これが『衛生保歯問答』の第二齶齒ト砂糖トノ関係  
と思われる。本誌第五十五号（明治二十年十二月刊）に茨城  
県会員、松浦守誠氏から「〇鉄漿涅齒ノ害ノ質問」につい  
て高山の応答が二十四〜二十七ページにわたり記載してあ  
る。これは『衛生保歯問答』の第三、涅齒ノ害ではなく、

第四涅齒の衛生上関係とその内容から思われる。すなわち  
歯科に関する質問は明治十八年、同十九年、同二十年と毎  
年一題づつあったことになる。

なお、大日本私立衛生会において歯科に関する発表は第  
十常会（明治十七年三月二十九日）に会員・千葉吾一氏が「口  
咽は百病の門戸」と題して演説したのが最初で、本誌第十  
一号（明治十七年四月刊）の十一〜十八ページに記載されて  
いる。

また大日本私立衛生会は初代会頭佐野常民、副会頭長与  
専齋であったが、明治二十年五月二十八日の第五次総会で  
役員選挙を行った結果、会頭山田顕義君八百三十九票、副  
会頭長与専齋君八百十六票で明治二十年七月一日本会改正  
規則により第二代会頭山田顕義と決まった。なお会頭の次  
点は長与、三宅両君とも百点以内であったとの記録から山  
田顕義の圧倒的な票数で決定した。この山田顕義こそ日本  
大学の学祖である。

（日本大学松戸歯学部）